

伝え合う力、わかり合う心 ネットワーク構築と連携

北川 裕子 (のしろ日本語学習会)

当学習会は1991年、中国残留帰国家族の支援から開始した日本語教室です。設立当初は子どもの支援は考えてもいませんでしたが、現場はそれほど甘くありませんでした。今回は、20年以上の実践の中で、子どもの日本語支援の意味を考えさせられた特徴的な事例を報告したいと思います。

(実践事例1)

中国残留婦人の孫(3世)として帰国したA君は13才。日本国籍も貰えず所沢での日本語支援も受けられないまま就学。当時の教育委員会は中学1年の彼を小学5年に編入、中国語が話せる高齢者に日本語指導を依頼。A君は半年で登校拒否。教育委員会からA君への日本語支援依頼が来たのは、来日して一年が過ぎようとしていた。

指導・・・命令形で指導を受けクラス仲間や教師にも命令形で会話、それが仲間に嫌われる要因と判明。文型・文法を最初からやり直す指導。特殊音などの表記・同音異義語・文型・文法・語彙の問題を多くやらせる。算数は学年を下げたこともあり唯一自信のある教科。まず中学進学に必要な日本語能力試験3級合格を目指す。合格後は国語の学習支援に重点を置き読解力に重点を置くことで高校に合格する。授業で理解できないところを日本語教室で徹底的に指導。高校3年で日本語能力試験2級に合格。試験にこだわったのは、帰化をしたいという彼の要望があったからである。無事高校卒業、働き場所も得、就職2年目帰化をなし得る。1990年代から2000年代までの12年以上にわたる支援活動だったが、家庭内言語環境が子どもに与える影響と、教科学習支援の必要性を突きつけられた最初

の事例。

(実践事例2)

フィリピンの母親と日本人の父親との間に生まれ日本生まれ日本国籍のB君の相談。通常入学し小学3年生になり学校から養護学校への転入を打診、日本語教室に通い英語も少々話せる真面目な母親。両親とも子どもの日本語支援は必要ないと思っていた。成績が悪いのは子どもの努力不足と、母親が家で英語を話すせいでと泣き崩れる。父親は仕事で帰宅は遅いが、子どもの教育には協力的。まず両親の許可を貰い学校長と会う。

B君は話を聞かない、指示が理解できない、読解ができない、落ち着いて座っていない等の行動から学校についていけないのではないかと判断、子どものためにも養護学校の方がいいのではないかとのこと。

障害児かどうかの判断を試しに一年待つて欲しい、日本語指導と学習支援をさせて欲しいと頼む。事例1のA君のこともあり教育委員会の信頼もあったので、任せて貰えることになる。当時は日本国籍の子どもに日本語支援者を加配するのは特例だったが、日本語教室と学校と連携しながらの支援が必要だと感じた。

文字・語彙の弱点、漢字の書き方ルビの確認、カタカナの確認、書き言葉と話し言葉の違いなど指導していく事で特殊音(拗音・長音・撥音・促音)の発音と表記ができないことが判明。母親に絵本を読んで貰ったことがなかったB君(英語の絵本は読んで貰っていた)、日本語が母語ではない家庭で、日本文の音読の宿題がどれ程たいへんかを実感、教科支援と日本語指導の両方を平行して行うことで一

年後に、通常学級についていけるようになる。中学から、工業高校に自力合格（この時点でN2レベルの日本語能力）高校入学後も欠かさず日本語教室に通う。数学はクラス1番の成績で推移、今年3月優秀賞をもらい高校卒業、大手企業への就職も決まる。

2000年代後半からの10年間の支援活動だったが、日本国籍の子どもであっても、母親の母語が子どもに与える影響の大きさを改めて考えさせられた事例だった。同時に、学校が異文化をルーツに持つ子どもへの対応や支援方法を何一つ持っていないことが判明。日本語支援で社会人として自立できる子供がたくさんいるのに、見捨てられる子供がいるのではないかと考えさせられた。

(実践事例3)

昨年、福祉課からの相談。

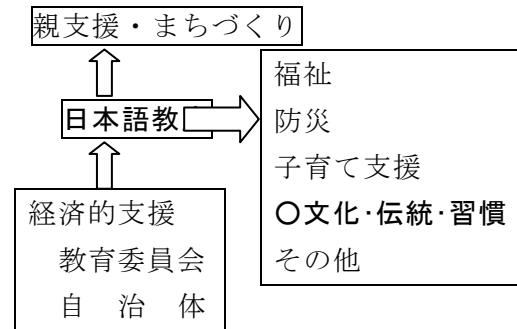
中国人の母親と中国帰国3世との間に生まれた4世C兄弟(小学4年・2年)について。日本生まれ日本国籍を持つ兄弟だが、中国人の母親は離婚し中国へ帰国、父親は20年以上前に日本に永住帰国したが子供の事や学校の知らせ等にも関心がなく親としての責任も果たしていない。話を聞くごとに父親は事例1のA君と判明。両親の希望で中国人の嫁を貰ったが離婚、孫を育てていたA君の母親も突然病死とのこと。13才で来日したA君は、20年以上日本に住み帰化をなし得ても、学校の様子も日本の文化も習慣も学んでいない。教えてもらわなくては分からないことがたくさんあるなど、福祉課と学校に父親であるA君の来日当初の状況を話す。

A君と会い今の状況と子どもへの気持ちを聞く。生活に精一杯で学校の事を考える余裕がない助けて欲しいとのこと。子どもの学習支援と同時に、福祉と連携し生活支援続行中。

大人の教室が子どもにも対象を広げていくようになったのは、家庭の言語環境が影響し、会話に不自由しないように見えても、学習に

困難が出てくる現実があったからである。教室を支えるハード面の支援と、地域全体で大人も子どもも支える意識を持てば多くの子ども達が救われる。(下図参照)

日本語教室が地域を支えるネットワークの要となる。



学習会は、花見やバス旅行、茶会や書道・生け花・料理の教室に加え、盆踊り大会も開催、日本文化に触れる機会を大切にしている。言葉はそれを支える文化や習慣があつてこそ成り立つ。日本語だけを教えても日本人の考え方や日本の文化を理解することはできないことを知らされて行く。社会の中にこうした人たちを丁寧に受け入れていくことは、彼らの人権を守るためだけでなく、私たちの社会をより良いものにしていくためにも必要なことだと考える。

※能代市は人口5万5千人弱、大学や国際交流協会はない。